2/16 鈴木国男虐殺
科学弾行動 報告

NO　1978・2・24発行

鉄鎖を砕け！

釜ヶ崎仁く仲間の会 獄中
発信　田畑邦弘

よろよろ歩きの獄中から
監獄暴動への発展が見えるか？

獄中獄外の仲間、兄弟たち！

2/4～2/6に及ぶ10日間の鈴木国男虐殺科学弾行動の報告を送る。2/16獄中戦闘を含む丸10日間のハンストの闘いを今朝、終結させた。体力、気力ともに未だ充分余裕を残している。次なる戦いの具体的準備に入る。報告をノートに記してあったメモから日記風に書く。

＊この前日、朝より「鈴木国男虐殺の真相を明かせ！」他の所長面会要求をつきつけて、断食闘争に突入。

＊2/15。（ハンスト二日目）ひもじさをこらえ、何度も体操したりランニングをする。夜へパン類がどっと入る。夜に入り飢餓感はしだいに薄れ、苦しみはなくなる。明日の戦闘を考える。時就寝。

＊2/16。デカパンの命日。（ハンスト三日目）

朝6時半頃起床。正座して起床チャイムの鳴るのを待ち、つっ、デカパンの苦闘と遺志を受継ぎ、プロレタリア解放、精害者解放の闘いを続けることを誓う。空腹感全くなし。気力、体力とも申し分なし。天気は快晴。気温相当低い。

起床チャイムが鳴った。

私は、窓を開け放ち大声で「大阪拘置所による鈴木君虐殺に抗議して闘うぞ！」「殺された仲間のウラミをはらすために闘うぞ！」とシュプレヒコールを行う。

突然、入口のドアが開けられ、眼鏡をかけた中年のブタ看が「コラ、ヤメロ！」と叫ぶや否や、5・6人大挙して房に押入ろうとする。私はそれを阻止すべく「オメエらが鈴木君を殺したのだ」と言いつつ、彼らと激突す。房の入口で5・6人ともみ合いなぐり合い。主看と区長も加わり敵は又増える。20秒も肉弾戦闘をしないうちに、敵の一人に後に廻り込まれ、いきなり手拭いで首をしめつけられる。私のひるむすきに、敵は両足を二人で持ち上げ廊下に引きずり出す。6人に完全に囲まれ、首を思いっきりしめられ口を手でふさがれ、両手両足をかかえ上げられる。けん命に抵抗し声を出すも、そのまま廊下を運れ、エレベーターに連込まれる。金属バットをみつけ反撃しようとするも、手足、頭、口の自由を全く奪われ続ける。エレベーターに乗せられ、ブタ看に顔面をひじでなぐられる。

「何をするか！」「このようにして鈴木君を

そのまま[redacted]ぶち込まれる。

この間、時間にして五～七分位のものであろう。もっと抵抗出来るのではないかと考えていたが簡単に鎮圧された。断食の影響で体力がおとろえていたためではない。

＜この戦闘の教訓＞

①2/6決起は、いわば敵に攻撃を予告しておくようなもの。敵は万全の鎮圧体制をひいていた者。この階では、私のためのみに六人の保安課のブタ看を配置して、息をひそめてドアの後に待機していたのである。この戦術全体どの突撃戦として当初から位置づけてはいたが、問題はこちらの戦闘決意の不充分性が露呈されたのだ。

②シュプレヒコールを行うことが目的でなく、敵と実力対決することが目的であったのであり、多数を相手に戦闘することを徹底して考えきり、戦術を確定する必要があったのである。地の利を背に、素手で対決できるわけはない。武器の問題をも含めて決意し、準備する必要があったのである。一書見ることを含めて、武器はいくらでも房内にあれる。

③この大阪の保安、暴力部隊として一度に投入できるのは7～8人であり、三十人位が一度に決起すれば及腰、秩序は危機に陥ることが解った。房内にこちらが身をみち、入口で敵と対決する戦いは、一対四ぐらいでこちらに有利である。[redacted]。

30人以上の大衆的実力決起を！この監獄における暴動決起を真剣に追求しよう！

＜保安房の中で＞

私が、保安房にぶち込まれてから、仲間が次から次へと運れ込まれる気配がした。どうも私が一番先に鎮圧されたらしい。小倉、同志の声が聞えたので「獄中弾圧を粉砕するぞ！」と応える。ドアをけとばし、大声で叫ぶも外にはほとんど響かない構造になっているらしい。

とにかく寒い。今日は特別に寒いこともあるが、この中で全裸で過すのは大変だと覚悟する。換えもせんを一時間おきに回すので、厚着が身にしみる。

[redacted]。長期戦を覚悟し、じっくり腰を落着ける。体操を一時間毎の換気のときに行い、大声を出し熱をもたせるようにする。

東京拘置所において、黒大善氏が保安房にぶち込まれていることを聞く。獄中獄外闘争の実力の戦闘的発展をかちとるために団結して闘うことを確認す。面会時間の合図までの引伸ばし看守どもが廊下で待ち構えていた。しかも戦闘にならず。

面会のあと、保安房に一時もどされるも、すぐ一般房に帰。皆、帰房のあと聞いてみたが「ウン」としか答えない。後で聞いたら、内容、同志が翌日の10時までぶち込まれていたのだ。

房に戻ると、医長より「所長面会要求についての回答がある」というのでついてゆくと、いつものニヤ顔が出て来ている。

「所長は面会する必要がないと言っています。」と言う。

そして、「点検棒の件、2月16日の大声を出し、暴れ暴行した件、ハンストの三件について懲罰を行うから」と言う。

私は頭に来て、「バカヤロー、ハンストで懲罰をかけるのか」というと、奴は「食事を取ることは、収容者の義務である。」

私は、懲罰に抵抗して反打すると宣言して房に帰る。

この日、戸外体操なし。室内でラジオ、腕立て伏せ柔軟体操を行う。筋肉のおとろえを妨ぐために毎日、朝、昼、夜、三度体操をすることにした。

※十八日（ハンスト五日目）

朝起きると喉がかゆくなる。冷たい茶を一口のもと痛みは消えたが胃に直下する。脳貧血にむちうちしていただく。風呂に入る。湯ぶねに長く入っていたら、少しふらふらする。

看守が「ブッタオレルじゃないぞ」と言ってくれたのに、いつもの調子でいたからである。でも気分そう快。

午前中、岩山、高山両志が面会にくる。小倉同志がケガを負っており、絶水断食で弱っているようなので、医務を通して接見に来たという。釜ヶ崎所長面会をもとめ多くの仲間が抑圧されていることを知らされる。

ベルの夜の室内集会は150人集り、すべての成功であったと聞く。「鉄鎖を砕け！」のパン好評の由。

この「鉄鎖を砕け！」が獄外で闘う人たちのために少しでも役にたつようにしたい。何であろうか？

断食についての黒川芳正氏の文章を読む。

「某月某日、体質改善その2。

断食も拘禁を逆手にとった戦いであり、体質改善、体力増強の最良の方法である。

断食が危険なものであるという常識がはびこっている。

午前12時頃「面会だ出る」と戸が開けられる。面会ができるかと驚きながら呼出しについてゆく。四人の「ブタ番」が護衛についてくる。

釜の仲間、山本君が面会にくる。外の闘いの報告を聞く。50人の仲間が大拘前に集うり、抗議集会を行い、所長面会を要求して闘った由。大拘に対する内外からの攻撃は闘いの陣型が未だ萌芽段階であるが一応かちとられたわけである。具体的内外呼応の闘いを徹底して追求することの中に、監獄解体の展望がある。

面会の後、一般房にもどされるとまもなく、再び保安房にもどされる。

保安房の壁の一部をはぎ取り、壁にスローガンを刻む。

※鈴木君虐殺を許すな！ ファシスト共滅！

※監獄解体！

※天皇制日本帝国打倒！

※人民の社会主義の共和国万歳！

看守が「メシを食え」と何度も言う。全く無視。

夜は寒さが一段と厳しくなる。ブタパンの粘死を考えつづける。ブタパンは、三年前の同じような寒い

夜を、大声をあげ、ドアをたたき抗議しつづけた。

あろう。看守に暴行をうけ、傷を負いながらも、暴力を打ちのめされることに抵抗し戦ったのだろう。食事もほとんどとらず、全身をもって抗議し戦いつづけ、13日間もこの年で生き続けた彼の戦闘精神を思う。

悔しみが悪寒にまじって全身をふるわす。夜7時に床に就く。ハンスト三日目、むもじさを感じず。

※十七日。（ハンスト四日目）

朝ブタ番にたたき起こされる。知らんぷりして寝ている。ドアをけたたましくゆくので頭に来てとび起きる。

「ふとんを出せ」という。無視していると、いきなりドアを開け、ふとんを盗ひようとふとんを持ってゆく。攻撃の機を逸したのを後悔する。あまり良眠らなかった。

接見禁止と水洗の札を赤紙一枚貼られたりするので、眠れず、気分がすぐれない。

でも思いのり体操し、指をひせ、さかだち、壁を相手の突きの練習をして汗をかく。

ハンスト四日目は、体力、気力ともに充実している。

午後三時、獄中者組合の井上さん面会にみえる。

廿二日（ハンスト七日目）

寒さは少しは緩和したようだが、外からエネルギーの補給をしていないため、寒さが身にしみいるようだ。

朝、区長と二本線が来て「メシを食いなさい。君は若いけど一度体が衰えるとやり返しがきかないよ。麹もだいぶ付いて眼も落ちくぼんでヨレいやないか」等説教をたれる。今で無視する。

夕方、パンとして、獄中者組合の「獄中獄外通信」（創刊準号）と共謀人の会の「獄中の仲間たちへ」（「戸外運動」に対する共同訴訟を実現しよう！）が入って来た。「獄中獄外通信」の発行の目的として①獄中獄外の討論を活発化し、対監獄闘争の闘争戦術を明確化し、共有すること、団結の質を深化させる。②連絡の緊密化 ③闘争の具体化をあげている。これには全面的に賛成である。又、この「獄中獄外通信」に黒い字の「一室が斗争と『斗的団結について』」あり、彼は、共謀人の会を島内の共謀人の会と獄中者組合との両結結一」の提案に対して、反対し、「獄中者組合と共謀人の会との路線の違いは、獄中者の獄中斗争の運動基軸＝獄中者組織化の基軸をどこにおくのかという点にある。すなわち、実力斗争におくのか獄中者組合であり、訴訟における訴訟が主軸なのか、ということは、極めて原則的な問題であり、決してあいまいにすることはできない。何を主軸とするのかという原則をアイマイにした『再編統一』は、獄中斗争の前進にとってマイナスである」と述べている。これは、正しい態度である。

獄中における階級闘争は、目の前にあるし、自己を投棄する日常的なものを、闘争を反映し、この様なわれわれの実践的具体的対応が裸のまま、直接的に表現される。従って路線上の対立も鮮明であり、「同じ獄中者」というような場にあるが故に「思想・政治路線」が逆に裸のままでぶつかるものである。共謀人の会の西山著のパンフに端的に示されている「迎合的著を御者的に闘える」路線は「実力的闘いをも行う」と言っているが、せいぜい獄中民主化、改良のための「実力闘争」であり、改良のための獄中闘争が主要なものであり、獄中者による日常的な監獄支配に対する戦闘は実力的戦い、団結の発展を阻害するものである。

共謀人の会の「戸外運動」に対する訴訟の提案は

隠り、敵に対する有効な武器である。

断食は、拘禁生活によって出口を失った過剰エネルギーを処理し、体内の老廃物を一掃し、体液を浄化し、体質を改善し、精神身体のあらゆる機能を活発化し、鋭利化する。

断食は自己の内なる原始人（原始共産人間）への退却である。死をひき寄せる断食は自らのまま死にのイニシャチブの奪還闘争である。

「自己身体の内なる原始人へ退却すること。すなわち自己の身体に本源的に備わっている動物的な自然的防御力、自然的治癒力、自然的攻撃力を呼び起し、生み直すこと。

近代医学は発想との対決。文明病が近代医学をすみ出し近代医学が文明病を拡大再生産する。したがって文明病そのものを拒絶する肉体の獲得こそめざされねばならない。

自己の身体の内なる原始共産人間へと退却することによって文明病、近代医学そのものと対決すること。これの肉体のメカニズムを観念ではなく、肉体そのもので理解し、意識はこれに対すること。

肉体そして文明世界を撃つ武器の体系となす鍵はここにある。」（第四回戦争新報を通じ獄内の会通信。No.1「獄中の闘争を通じて」より）

この観点は全く素晴しい。断食闘争を続行する覚悟は意欲が又一段と強まるのを覚える。

私もわが内なる「原始共産人間への退却」戦を続行することにした。私は又、この断食闘争を通じて、昨年末から自分に課してきた自供問題総括―自己批判を深化させ自己の中に革命思想と戦闘精神を確固として打ち立てることを目指している。自己の反革命的な感性、思想を解体し、恵ぐまれた「政治犯」しかも帝国主義本国人民の立場を解体し、ボリシェビキ、プロレタリア革命兵士の革命思想で戦闘精神を一歩一歩かく得してゆく決意である。

廿九日（ハンスト六日目）

朝、茶を一杯飲む。気分そう快。疲れ全くなし。

スイ「中国の赤い星」を読みはじめる。断食のために感情の制御装置がマヒしているのか感激して何度も立ち止まる。こんな経験は、ここ暫くなかったことである。

中国革命戦争の重責を負った共産主義者たちの苦闘が手にとるように理解できる。写真を見ると、ひょうきんにやせて頬のこけおちた顔を延安時代の毛沢東や若き赤軍大学校長林彪が出ていた。この時代の彼らの顔のうえが、後の威厳にみちた顔よりもずっと親しみを感じる。

「強制診断」である。医務の待合室で他の獄中者と話し加わることもできるので、ついて行く。待合室で知人待たせめ。二人と話しをすることが出来た。2/6 津田のことを知っていた。確実に他の獄中者に伝えられている。体重減少。実入する前が44kgであったから10kg減。血圧200～180。「全く正常だ」と医者はいう。正常であることは自分でも解る。今のところ、断食はせいぜい熱量に転化させ、躰の活動を支えているらしい。やがて、生命をきりきざむ転換点にさしかかるはずである。今までのところ、体力、運動能力、思考力に全く変化がみられない。むしろ、頭はさえてきて、精神は緊張して、集中力も増しつよい。すばらしい状況が続いている。

フランツ・ファノン『地に呪われた者』を読みはじめる。全く新鮮な感慨が泉水のように胸をみたす。彼は、は、間違いなく創れた植民地人民のために書かれたものだ。――「祖国は進撃開始する。一人一人の原住民にとって、祖国は国民が闘っているあらゆる場所に在る」とする。彼らの同胞愛は、彼らが君たちつまり人

「我々は団結して、一人の獄中者の不当な拘禁による病死、苦痛も逝さず、拷問を許さず追求しなければなりません。そのために、我々は連帯と団結への端緒道を共同訴訟を通して切り開こうではないか！我々はそのために共同訴訟を提起するものです」と述べている。そして、共同訴訟は団結のためのものであることを強調し、共同訴訟が獄中者の分断を克服しようとするものであると位置付けられている。この事務局の呼びかけは、獄中者組合からの批判を意識してかかれているが「筆者が恩恵を受ける」団結の質の問題や、闘争の目的を持たないだければ、全く観念論な文句である。形式を借り、内容を提起せず、団結の基軸をアイマイにするズブズブの改良主義的傾向は批判されねばならない。

沖内君の訴状（案）「意見陳述書」の中では「この共同訴訟」の連帯は、たいへん広く拡っている。「一つは現監獄法の無効を証明、主張することであり、それにともなう局の弾圧を暴露、追及していくことである。もう一つは、現実の我々の疎外化を強制されている事実を追及し

たいという憤しみと怒りである。彼らは誰も人が敵を殺した、毎分毎秒、敵を殺す可能性を持っている、という事のように、彼らは兄弟なのだ。

彼は貧困のどん底で、強力に武装した金持を相手に戦う乞食の戦士なのだ。決定的な勝利を期待しながら、また多くの場合、何一つ期待することもなく、うんざりするほど敵に攻撃をかける。もとより手ひどい損失を蒙るのは覚悟のうえだ。植民地の軍隊は光景になる。互画割り晴戒、掃討、強制収容、報復攻撃。もちろん彼も殺される。だが戦士はそれも承知だ。この新しい人間は、自分の人間としての一生を終わりから始めようとしている。彼は自分を潜在的な死者と見なしている。……」（サルトルの序文より）

《第三世界》革命の偉大なマルクス主義者、ファノンは「原住民たる植民地世界の告発とは、さまざまな観点を現実的に対決させることではない。それは普遍的なものを人間の人間性を遮二無二主張することだ。」と断言する。日本のプロレタリア下層原住民"釜夫"もかくあるか？

「厳正独居」「単独運行」を廃止させ、いつまでも自由に運動させる、又は生活を自由に自主的にできるようにおもうことである。」と述べている。

私はこのような改良要求が逆に敵に利用され監獄法改悪への反撃の役割を果すものではないかと危惧する。その危険性は法廷人の会の運動にはらまれている。日常的に対する非和解的態度と戦いを放棄させた改良闘争は必然的に支配の補完物に転化するものである。

※二十一日（八ヶ月目）

朝、足がりたがゆくて目をさます。足の指全体がしびれ、やけのため、痛いものようにくはれあがっていた。ここ二、三日ひどくなったようである。治療法は入浴に入ってよくこすりマッサージすることである。明日、風呂に入って行ってきたいする。体調、気分とも良好。体操をやったら、二本指が出て、「今日で何日断食しているの」と聞いてくる。私は無視してなわ跳びをつづけていると「ばかまかいな！いやんもう気だな」と言って逃げる。今日あたり、医務から呼ばれが来るなと思っていたら、やっぱり来た。

5/7. 私と妻と時間係に基きしデッチ上げ、見出し標題で69ヶ所行わる。今日のほとんどとなりいるのを知る。

多面に「獄中者組合の戦闘的改善の発展のために――大野荒一君の『提案』に答える――」と題して、荒木哲郎、大野荒一両氏の投稿が掲載されている。

以下の諸点をわれわれも共通認識としなければならない。

㊀「日本帝国軍国主義隊を主体に戦い取られた9・28が闘争は、国境を越える獄中獄外闘争に新たな地平を切り拓いた。獄中戦を奪還闘争こそ（救援）の最高形態である。革命戦争にみける（救援）の最高形態である。捕虜の実力奪還こそ真の（救援）の名に値する（救援）である。」

㊁「組合は『監獄内の迎過改善、民主化、人権を要求して闘う収容者大衆の組織であるべきだ』ではない。このような組合の枠づけ、すなわち監獄の民主化を目的化した改良闘争は、なんずく、今日が監獄法改悪という『メムチの秘密化』をもって対応してきている現在、獄中者の戦いを、監獄の支配秩序の中に回収し、つなぎとめる役割しか果たさない。」

㊂「獄中者個人が決ず、戦う主体性（使命）を確立することこそ、獄中者の戦闘的団結の前提であり、基礎である。獄中者個々人が監獄支配への奴隷的屈服を拒否し、獄内にも体的に決起すること、その闘的決意性に基づいて獄内で組合を媒介環として地結的なものへと高めること、すなわち独りでも戦える獄中者のまなざしに依拠した戦闘的団結を形成されなければならない。」

㊃「我々は、考えの違いのみをもって団結を拒否する偏狭なセクト主義には組みしない。共通のテーマに対する戦う事実行為を基準にし、実力闘争を軸にした戦闘的団結の形成をめざす。」

この四点をわれわれの共通の認識とし闘いすべきである。

× × ×

夜、ラジオと柔軟体操をやっていたら右膝がガクガクする。脚気の前兆症状か？

心臓、肺が弱っている証しは全くない。しかし、一応今日で、断食闘争を終ることを決意する。

5/6～5/8 獄中獄外闘争の総括及び今後の準備に明日から入ることにする。

5月12日（ハンスト9日目）

朝、風呂に入る。久し振りの（番風呂）である。足の指のしもやけが悪化するように痛い。がまんしてよくマッサージする。

胴まわり、腹のぜい肉、脂肪分がすっかり削ぎ落ち、少年時代のような体型に戻っていることを知る。凡ちょっかいに苦を鍛。

朝から雪が降ったが、一日中ファンを蹴る中になって読み寒さをそれほど感じなかった。

事務の黒川氏より第1回事務局の戦いの速報届く。

5/13 弾圧（荒木まりるえに対する看守の暴行）に対する共同闘争を支持しろ！という呼びかけがある。夜、悪寒がするので、この断食闘争はじめて9時前に就寝する。

5月13日（ハンスト10日目）

朝10日振りに、通便があった。山羊の糞のように固くれい、きれぎれのやつである。これで五臓六腑の中は、毎日排泄する水分以外全くなしである。

戸外運動でなわ跳び、さかとび、ボールなげをするもいつもとちがう。息ゆれも特にしない。体がとにかく軽い。陸上競技をやっていた頃のような感じである。

小倉同志と顔を合せ、言葉をかけ合う。元気そうだ。

面会に高橋さんが来る。

地内Gが不当懲罰に石和し、「絶水ハンスト」「不眠」「パン一枚」で抗議闘争に入っていると聞く。この寒いのに「パン一枚」で不眠、絶水ハンストは決死の闘争である。消極的抵抗闘争から攻撃的な戦いへの転換か？

5/10のまき23闘争公判を傍聴したと言う。「証拠が乱れた」からだと言う。よく事件が解らないが詳しく聞かなかった。

「救援」106号、5/5監獄法改悪阻止共闘獄中ビール基、「壁」いろいろなど送入される。「救援」106号に、77年弾圧の様相」と題して、青年の初の弾圧の実態をわかりやすく提起している。

「家宅捜査」の項で、爆取闘争でわれわれに対する5/10全国一斉家宅捜査を表に入れてあるが、「8.10爆取3系（所持）等の時、山谷をはじめ全国の所」と書いている。われわれの調査では、これ所全部を未だ把握していないのである。山谷ではガサ入れされたとは聞いていない。山谷を含めて今はそれ組織できるかもしれない。山谷のどこに入れのかを急ぎ調べ、確認する必要がありそうである。

又、これから去年一年の爆取デッチ上げガサ入れが、

少ず糾弾され、遂に「あらかじめ」という事実、重要時の災ゆる者、人民は殺された仲間の苦闘と遺志を引継いで闘争を発展させるという事実――この二つの明確な事実こそ、この闘いの成果であり、白雪和加者どもは必ず打ち倒され、人民が必ず勝利するこの証でもある。

この日、大拘は、われわれの獄中獄外の決起を予知し厳戒体制でもって臨んだ。保安課の眼が全員及革命領左部隊として配置され、外に向っては警備隊が準備されていた。もかし、われわれは敢てこの厳戒体制下で決起し、戦闘的に闘い、拘束し、敵を悩ませ、消耗せしめ、味方の戦闘的団結を打固め、今後の闘いの貴重な教訓をつくり得た。それは――

① 決起したわれわれに完全に正義性、道理性があり敵にとっては日頃から鈴木君虐殺問題で糾弾されつづけているという心理が、われわれを精神的優位にたたせ、敵を消耗させた事実（若い看守の「人生お前たちには負けるよ」とつぶやく迷惑していた）

② 敵の反革命策動が全面的に展開されなかったこと。この監獄の中で如何に分かりやすく決起すれば、完全にあらしとげられるということ、敵は2/6のような反革命体制を日常的には決してとり得ないこと（人員の都合上）

③ 監獄の中の監獄」に保安課が壁が具体的に取払われたこと。2/6、2/10、2/16の三日間、敵は保安課に必死に入ったわれわれと面会者との面会を認めざるを得なかったこと。これは、獄外の大衆的実力闘争の圧力が獲得した最大の成果である。この「監獄の中の監獄」の役割は獄中者に対する弾圧、保安処分の武器であるが、これを無力ならしめるには常時10人がここに必死に入れるような状況をつくり上げることである。そうすれば、当面（新選挙法の問題）新たに必死に入れる人はいなくなる。

われわれにとっては、保安課も一般房とあまり変らないという心構えを持って、この保安課に必死に入れた機会に徹底して闘争を展開する。運動日誌

――南軍事の後――

2/4 朝、麦を食おうとしていたら、生看があわてて飛んで来て、「少しつづ、ゆっくり食べろよ、昼までかかってもいいから」「やっぱりメシを食わねばあかん。顔の形が変ってしもうたやないか」と驚いて言う。

朝、全ての食を、ラッパ2/4くらい位、良くかんで、ダラダラ時間をかけ食べた。舌の感じが自分のものでないみたいである。胃腸の調子はすこぶる快調。

2/5 現在、顔に少し、むくみを感じる。これは何故だろう。急に塩分（味噌汁）を取ったためか？

この10日間を通じて、最も飢餓感に悩まされたのは、2日目の夜である。その後、胃袋に全く何もなくなればあとは楽なものである。おそらくこの10日後に、体の変調をいろいろ生じてくるであろう。

とにかく10日間、お茶だけで普段とほとんど変らずに動き来ることを知ったことが最大の収穫である。

「精神身体のあらゆる機能を活発化し、鋭利化」し体を増強しているかどうか、いまのところ不明である。

精神はほど良い緊張感を保ち集中力がかってない程感じられる。これも断食の成果であろう。

成島同志から手紙がきた。

「2/6 獄中・獄外共同行動――共同総括作業をかちとろう！」と題する文書が入って来た。

共同総括作業によって「政治的基軸の統一性を形成し、斗争の統一性を形成し、獄中獄外における革命的大衆運動の形成を保証しよう。このような斗いはまた、金竹山治（←大阪仮東拘）の四点同盟、戦略同盟を形成していくものでもあります」と彼は提起している。全く賛成である。

2/6 獄中・獄外共同闘争の成果と今後の問題

一、成果

われわれ釜ヶ崎仲間（伝）獄中者は、この2月16日に日帝権力（大拘、地検、裁判所、府K）による鈴木国男君虐殺に抗議し、実力で戦闘的に戦い抜いた。二年という歳月が経っても虐殺者どもは

主義者、民主的な活動の団結の重要性は強調しておく必要があるだろう。当面、徹底した公開の討論を行うことのも良い方法である。

更に、われわれは、いわゆる一般刑事犯といわれる獄中者の圧倒的多数の人たちとの団結問題を実際的に解決することがわれわれの[illegible]。ここ大切では、現在"極道"が圧倒的に多い中で彼らの団結が具体的・実際的にも乗るものかどうか一全く未経験のためにかい目見当がつかない。

② 他の監獄に囚えられている仲間たちとの団結問題、事務の仲間たちとの連絡、闘争の事実行為をもった団結から、組織的・組織的団結へと高めゆく必要があろう。獄中者組合万歳文部の建設の問題を決着づけよう。これについては別文書にて提案する。

③ 獄中・獄外の団結問題について。

われわれ獄中者の戦いは、獄外に依存したものであり、獄外に不必要な負担を負わせるものであってはならないと考える。われわれ獄中者が自主的に戦うことを基本とし、むしろ獄中の戦いをもって、獄外の仲間、人民の闘いに奉仕するものでなければならない。

われわれは拘禁され、がんじがらめに抑圧された状況を武器として闘う。獄外の仲間は、自由な、主動的状況を武器として闘う。この差異を明確に把握、その上で、双方の発展にとって不可欠の課題を断乎として団結して解決することが望ましい。

獄外の救対部の仲間、救援センターは、獄中者の下僕であってはならず、自己の固有の闘いの課題、思想、戦闘精神をもって活動を担い、獄中者と面を会わすことで団結しているのではなく、戦いを通じて団結する内実を不断に持たなければならない。そうでなければ、技術的・事務的活動に没してやがて消耗してしまうものである。

この間の救対部活動の停滞の根拠を徹底的に明らかにし、克服しなければならない。

④ 獄外の仲間たちによる対大拘闘争の創造的発展をかちとること。獄中者に対する支配

と、団結の運動不足をより余計いっそう強まる必要がある。そうすることで保安課の攻撃を封じ込めるという心理的恐怖を払拭することができるだろうから。

④ シュプレヒコール、演説の内容が獄中者の中に一定知られて行っていること。獄中者たちは、常に耳をそばだて、目をこらし仲間たちの動静に気を配っているのであり、雑居房の仲間たち、合同運行の仲間たちの話題の中に[illegible]の体験談に入りこんでいるのである。仲間たちへの宣伝、工作を創造的に発展させる必要がある。

⑤ 仲間の会獄中組の四人が戦闘的・実践的に自主として闘い、事実行為として団結していることを示したこと。「釜ヶ崎一大拘を通底する」プロレタリア兵士の戦闘の継続を実践的に遂行し、釜ヶ崎一大拘をともにプロレタリアの解放の戦場とし、われわれの決意が具体的に爆発したことである。

⑥ 獄中獄外を通じて、同時的・実体的に、仲間たちが共同して、同じ敵に対決して戦い、監獄に対する内外呼応決起の萌芽をかちとった

こと。この発展上に、監獄解体の具体的展望を見出しうること。望みである。

二、今後に残された諸課題

[redacted]

[redacted]

今回の闘争の中から緊急かつ重要な問題をあげるならば――それは、

① 大拘における他の獄中仲間との団結問題。

これは成島問題も提起しているが、獄中の社会

者は、監獄という建造物ではなく、具体的人であり、市民である。この事実を深く認識し、彼らを精神的に追いつめ、獄中者に暴行したり虐待させなくするための闘い、明るいファシスト看守に対しては転復する等、具体的闘いの工夫を徹底して追求する必要がありそうである。

同時を決めて玄関に押しかけ、スピーカーでガナル一倍の闘いから、具体的実効を重じた闘いへの転換を。

⑤ 獄中のわれわれが、ここにみる戦闘暴動への戦術問題を解決するために当面は何でも、考えられるありとあらゆることをやってみる、敵の出方をみる、自己のカを知る必要がありそうだ。

これまでの獄中の経験教訓を真剣に学ぶ必要があり、当面は単独で又は少数でできるものは実際にまねてやってみることが是非必要である。

望すく。

私の方から総括としては、こうなるものであるが、成島同志が提起している獄外への総括上の問題提起を仲間たちが良く検討してくれることを望む。

又、26室内暴金の報告、提起されたも張なと全く知らないので、一切ふれなかった。私は詳しく知りたいと思っているのは、金が精神病者暴行の人たちの提起であり、保安処分、精神障害者差別に対して実体的にどのような闘いが取組まれているのかということである。資料があったら、是非送入れて欲しい。

× × ×

3月号は、われわれ（田畑、成島、十倉）の礼道務事件の第三回公判で、意見陳述を行う予定である。私の意見陳述は、①不当弾圧を糾弾し、検事庁、府下、裁判所に対する弾劾、②現在の大阪監獄支配の実情③獄中・獄外闘争の発展とプロレタリア人民大衆の未来、という形で考えています。一時間位のものに、まとめたい。

× × ×

現在のところ、まだ懲罰委員会の呼出しがない。来週かもしれない。正座妨害はすでに2ヶ月以上続いていますが、今では黙認です。